

# 水土文化研究によってもたらされる農業農村工学技術者の変革

A consciousness change of Irrigation, Drainage and Rural Engineer  
by "SUIDO" Culture studies (Culture of Land and Water)

山本徳司 後藤眞宏  
Tokuji YAMAMOTO Masahiro GOTO

## 1. はじめに

水土文化研究部会の設立趣旨において、農業農村工学技術を糧とする者は、施設、制度、知識などの水土文化の基層だけでなく生業、儀礼、伝承等の周縁についてもこれを研究の対象として取り込み、技能として昇華していくことを宣言している（原文ではない）。そして、より良い社会を形成していくためにも、「周縁までを含むさまざまな「知」の総体を紐解き、水土の歴史に残る事業を成し遂げた技術思想、伝統的な施設に係る技術の解明を強力に推し進めるとともに、時代背景となった自然との共生や克服の精神とともにそれを継承し、さらには新たな時代に合った形につなげていくことが私たちの使命である。」（原文）と明記している。

この設立趣旨を受けて、我々は、水土文化研究推進のため、工学の枠を超え、人文・社会科学、自然科学の各分野との交流連携を図り、「水土文化」の総体に対する姿勢や学の体系の確立を進めることを目的に、大会での企画セッションや研究会等を開催してきたつもりである。

5年の歳月を経て、設立当初の事務局の一員であった筆者らは、水土文化研究推進の新たな意義を感じた。すでに内包されている意義ではあるが、本セッションでは、新たな意義として整理していく中で、水土文化研究の行き着く先とその船に乗るべき技術者のありようについて考察してみたい。大上段に振りかざしてはいるものの、筆者らに本文を主張するほどの本来の力量はないが、整理することが、本研究部会の次のステップにならないかと考え、恥ずかしながら本表題を立てさせていただいた。

## 2. 水土文化研究における分野の危うさ

人文諸学は「言葉」の学問と呼ばれ、圧倒的な自然言語の文書力で数理的解法をも駆逐する論理的思考を行っている。複雑系の数理的な説明をも超える思考力である。文学などは、様々な数学定理にも匹敵する。それなのに、我々農業農村工学に携わる技術者はとかく、その曖昧な感覚に戸惑いその作法を認めることができないでいることが多い。もちろん、そうではなく、他学の作法や流儀を敬う仲間もたくさんいる。しかし、大方はそうは成れないでいるのではないのか。専門家に任せるというのは、作法や流儀を知って言うことであり、解らないから丸投げという意味ではないはずである。理解する努力をした上での「学」の交流が本来の形であろう。

「文化」という言葉を使っただけで、周辺の情報ではあるが、核となる技術ではないと初めから決めつけてはいないだろうか。「分野」が異なる思考であっても、脳のシナプスの動きからすればさして大きな違いはなく、脳内のわずかな数ミリ離れたところの反応の違いでしかないにも関わらず、まったく違うものとして見てはいないか。

「学」や「分野」という体系はもちろん必要である。学における様々な「知」は言語によって伝わる。数理的な作法であれ、文学的な作法であれ、結局は言語が作法の一つになっている限り、作法が理解できれば安心でき、美しく快適である。しかし、それは意志疎通の手段である。人が事象を理解するとき、自己が取り入れるべきは「言語としての知」ではなく、「知という感覚」であると考えた方がよいのではないのか。

「知」となる前に感じる事が大切なのに、我々は感じることもせず、様々な「知」の作法を避けているのではないのか。

### 3．水土文化という脳梁の問題

水土文化研究部会は、平成 18 年 3 月より 1 年かけて、学会誌の講座「水土文化への誘い」において、水土文化の読み解き方、モノ・ヒト・コトの見方、聴き方、そして集め方と表し方を解説してきた。この中で、我々の具体的研究課題としては、事業史と事業を取り巻く人と人々の生活や知恵、集団の動態を見る農業土木史の研究、水と土の操作の技法、伝統的工法等の水利遺産から見える土木技術史と技術の再構築の研究、様々な人による水と土の操作の結果において変遷してきた景観や環境の構造分析の研究、水土社会の形成・維持や水土の営みの根底にある生活者の心意や価値の解釈と現代社会への展開の研究、地域生活者のライフヒストリーをたどる中で生活者の思いや意識に同化または鳥瞰する中で、それらの意識を実践的に地域振興に活かす研究等である。

これらの研究を脳機能的な概念に当てはめた整理をすると、～ は地域の情報を読み解き時間的、空間的変遷を整理する左脳的問題として位置づけられ、～ は情報から直感的にその地域の様相を捉え創造的に地域を実践的に動かしていく右脳的課題に分かれる。決して、右脳的问题是右脳ばかりを使っているわけではないが、言いたいことは、もし研究がそれらを個別にやっていくことで事足りるなら、水土文化研究の役割はかなり狭い範囲に留まることになるのではないかとということである。

それぞれの個別の課題が最終的には自然に連動していくことは言うまでもないが、ここで筆者らが言いたいのは、農業農村工学研究が率先的に取り組むべきは、右脳的問題と左脳的問題を繋ぐ脳梁的問題ではないかということである。数理的、言語的に分析するのではなく、脳梁を鍛えることによって、脳梁的問題を解くための方法論を見つけなければならないのではないかということである。

### 4．水土文化研究で技術の感性を磨く

専門性と総合性の知性はどちらも必要である。只問題は、現代社会が経済至上主義の中で、専門性を求めすぎているという点である。現代社会はどちらかと言うと、右脳、左脳どちらかで考える問題よりも脳梁力が必要となる問題が多いにも関わらず、未だに、理系文系と分け隔て教育は進み、行政業務は益々縦割り分化し、脳梁の問題は先送りである。

そんな時代において、農業農村工学の研究者や技術者は「水土文化」と言うとてもなく大きな脳梁の問題に挑戦をしているということになる。様々な「学」と連動し、右脳左脳問題を解き明かしていくと共に、その間を繋ぐことに敏感に反応しなければならない。

脳梁の問題を扱うことは、研究者としては「器用貧乏」とか「なんでも屋」等と言われ、しっくりいかないところもあるが、技術者として水土文化研究に勤しみ、脳梁の問題に当たり、日頃から脳梁を鍛え、脳梁力によって発達すると考えられる総合的知性を得ることは、技術感性を磨くためには重要なことである。政策や事業に携わる者が、また、農業農村工学研究が、自分の技術者としての役割範囲を無理に閉ざすことなく、専門技術者としての役割を果たしながらでも、常に総合的知性を得る努力はしておいた方が良好だろう。

文化は面倒くさいとか、景観は分からないとか、生き物は鬱陶しい等と言って、専門家に投げてしまおうというのは、農業農村工学技術者の姿勢ではない。

複雑な社会の中で、新たに「環境」「景観」「文化」等が入ってきたことに対して、様々な「学」に支援を受けながら、技術そのものを追従させることも必要である。しかしそれだけではだめだ。農業農村技術者自身が脳梁を鍛え、総合的知性を以てそれぞれの業務に向かうこと、それは新たな事業を興し、新たな研究の枠組みを構築することに繋がるはずだ。その変革の契機を担うことこそが「水土文化」を扱う新たな意義だと思うのである。

最後に、江戸の自然哲学論者三浦梅園の言葉を借りて締める。彼は一書簡で、「天地達観の位には、聖人と称し、仏陀と号するも、もとより人なれば、畢竟、我講求討論の友にして、師とするは天地なり。」と述べ、習家（読み「じっけ」：人の世の俗的立場／山本解釈であり、本来は仏語で深い意味を持つ）を払拭しないで生じる学流の派閥に意味がないことを説いている。我々農業農村工学技術者も、習家を払拭し、「学流」を師とするのではなく、「農業・農村」を師としなければならないのだろう。

---

[ 参考文献 ] 尾形純男編注訳，1998，三浦梅園 - 自然哲学論集 - ，岩波文庫

